諸國お伽話

（左の諸篇は Eleanor L. Skinner And M. Skinner 兩氏編 „Nursery Tales From Many Lands." による）

日本幼稚園協會研究部

○三人のお友達

或處に鼠と腸づめと豆の三人が、小さいお家に一緒に住んで居ました。毎日二人づつ外へ出て働いて、一人がお留守番をして、晩の御飯のおしたくにスープをこしらへました。或日、鼠と豆が、腸づめに

「あなたは三人の中で一番上手にスープをこしらへるけど、一體どうしてするのですか、聞かせて下さい」と、云ひました。腸づめは、

「それはかうするのです、お湯がグラ〳〵煮たつて來た時、私はドブン、と鍋の中にとびこんで一度か二度かけまはるのです」と云ひました。鼠は感心して聞いて居ましたが、「私もして見よう」と獨り語のやうに云ひました。小さい豆はハッハッハと笑て居ました。

次の日、豆と腸づめは外へお仕事に行きましたそして鼠はお留守番をして、スープをこしらへる役でした。鼠はスープをこしらへながら、

「さう〳〵、腸づめが云つたやうに煮たつて來たら、お鍋の中を一、二度かけまはりませう、きつとおいしくなるに違ひない」と、獨語を云つて居ました。其の中お湯が煮たちましたから、鼠は鍋の中にはいりました。二度どころか、鼠は一度でスープの中へ沈んでしまひました。

夕方、豆と腸づめがお家へ歸つて來ました時、

鼠は居ませんでした。家中、方々さがしましたが姿も影も見えませんでした。「私達のお友達はどうしたんでせう」と、腸づめは、心配しました。豆は、「まあ、行つて晩のスープでも食べませう」と云ひました、そしてスープのお鍋をあけて見たら留守の間に、何が起たか、お友達がどうなつたか皆解りました。

「まあ〳〵、可哀さうに鼠はスープの中へ沈んでしまつた」と腸づめが云ひました。

「スープの中へ沈んぢまつたつて、馬鹿な鼠だなあハッハッハ、、、、」豆はいつまでも〳〵、あんまり笑たので、背中がはぢけてしまひました。豆は大急ぎで、靴なほしの處へかけつけました。靴なほしは黑いつぎ布をあてて縫てくれました。それからといふものは豆の背中にはきつと黑いものがついて居ます。

腸づめは豆のやうに笑ひませんでした。淋しさうに戸口の處に坐つて、「可哀さうな〳〵鼠さん」と云て泣き出しました。すると、犬が道を歩いて居ましたが、ここの前へ來ると立ち止て腸づめさん、あなた何を泣いて居るの」とたづねました。

「鼠が可哀さうにスープの中へ沈んでしまつたのです。可哀さうで、泣かずには居られないんですもの」、とポロ〳〵涙をこぼしながら云ひました。

「まあ、鼠がスープの中へ沈んでしまつたつて、ぢや私は泣きながち道を歩いて行かう」と云ひました。途のそばの垣根が、犬に、

「犬君、〳〵、なぜ君は道を歩きながら泣て行くの」と、ききました。

「鼠がスープの中に沈んでしまつて、腸づめが戸口に坐つたきり泣いて居るんですもの、どうして僕ばかし泣かずに居られるもんですか」と犬が云ひました。垣根は、

「まあ、鼠がスープの中に沈んでしまつたつて、ぢやあ私は道ばたに倒れやう」と云ひました。そばに生えてた木が、「垣根さん〳〵、なぜあなたは

そんな處へひつくりかへるの」とききました。垣根は、

「鼠がスープの中に沈んでしまつて、腸づめが戸口に坐つたきり泣いてゐるんです。どうして私ばつかし知らん々泣いてゐるんです。それで犬が途顔して居られるもんですか」と云ひました。

「まあ鼠がスープの中に沈んだんですつて、ぢや私はここの流しへ木の葉を落さう」と云ひました木の下には小さい流しのそばに水道のくひが立て居ました。風も吹かないのに急にバラ〳〵と木の葉が落ちてきました。水道はびつくりして、

「まあ木さん〳〵、なぜあなたは私の上にさう木の葉を落すのですか」と、ききました。

「鼠がスープの中に沈んでしまつて、腸づめが戸口に坐つたきり泣て居るんですもの、犬は道々泣くし、垣根は道ばたにひつくりかへるし、どうして私ばかし知らん顔して居られるもんですか」と木が云ひました。

「まあ、鼠がスープの中へ沈んだんですつて、ぢや私は水道の水を出しつぱなしにしよう」と水道が云ひました。そしてどん〳〵水道の口から水が流れました。水汲みに來た女中がびつくりして、

「まあ、水道さん〳〵、どうしてそんなに水を流すの」とききました。

「鼠がスープの中へ沈んでしまつて、腸づめが戸口に坐つたきり泣いて居るんですもの。犬は道々泣くし、垣根は道にひつくりかへるし、木は葉を落すし、どうして私ばつかり知らん顔して居られませう」と水道が云ひました。「まあ、鼠がスープの中へ沈んでしまつたつて、ぢや私は手桶をこはしてしまはふ」と、女中が云ひました。それを見て居た下男が、「もし〳〵、なぜあなたは手桶をこはすんですか」ときました。

「鼠がスープの中へ沈んでしまつて、腸づめが戸口に坐つたきり泣いてゐるんですもの、犬は道々泣くし、垣根は道ばたに、ひつくりかへるし、木

の葉は落ちるし、水道は水を出しつぱなしにするし、どうして私ばつかし、知らん顔して居られませう」と、女中が云ひました。

「まあ、鼠がスープの中に沈んだんですつて、ぢやあ、私は世界中をあつち、こつちかけまはりませう」と云つてかけ出しました。

それから今でも、下男はせつせとかけまはつて働いて居ます。（ドイツお伽噺）

○野山に住む者

はてしなく廣い野原に、大きな牡牛の頭の骨が雨風に晒されてころがつて居る。これを丁度いゝ住家にして其中に小さい二十日鼠が澤山住んで居る。

歌の聲

「元氣な〳〵二十日鼠
小さい鼠は寒くない
暖で氣もちがいゝ」

廣い原の、地平線下に日が沈むと、空には星が一ッ二ッ、だん〳〵宵暗になる。二十鼠の住家には、美しい、よく光る燈火が、ともされる。鼠の踊りが、はじまる、歌の聲がまたする。

歌の聲

「元氣な〳〵二十日鼠
小さい鼠は寒くない
暖かで氣もちがいい
おどつて、うたつて、
ウィオー、ウィオー」

星の影一つ〳〵失せて、眞暗になる。冷たい風が吹く。チラ〳〵、雪が降り出す、濕つぽく、だん〳〵強く眞白につもる。二十日鼠の住家のみあかるく、樂しさうに、歌たり、おどつたりする。鼠の聲たえずする。

歌の聲

「ウィオー、ウィオー」

やがて、雪の上をポッ、ポッと飛ぶ者がある。よく